

# 社会的・政治的プロパガンダに利用される ナチス・ドイツのクリスマス（上）

—冬期救援事業(WHW)と「みんなのクリスマス」の考察を中心に—

桑原 ヒサ子

## はじめに

クリスマスが社会的・政治的プロパガンダとして利用される例は、ナチス・ドイツ以前にもあった。<sup>1)</sup>一つは戦争である。すでにクリスマスを祝う習慣を知っていた将校たちは、第一次世界大戦の戦場で「ドイツのクリスマス」を祝ったが、ロウソクを灯したクリスマスツリーは民族意識や愛国心の高揚に利用された。特に、総力戦となった第一次世界大戦では、銃後と前線の連帯を強化する目的で、銃後で準備された大量のクリスマス小包が前線に送られた。もう一つは、第一次世界大戦の敗戦による精神的打撃、政治的混乱、経済的困窮のなかで、とりわけ 1929 年の世界恐慌後に見られたように、クリスマスは、反ユダヤ主義運動に利用されたり、富裕層に対する労働者階級の闘争の手段になった。ナチス・ドイツもヴァイマル共和国末期の経済的困窮を引きずって始まったため、経済的立て直しは内政の安定（ナチ化）と共に最重要課題となった。その方策の一つが、クリスマスの利用だった。

国民社会主義のプロパガンダについては、ヨーゼフ・ゲッベルスの国民啓蒙・宣伝省やアルフレート・ローゼンベルクの部署等による、ラジオ、映画、新聞・雑誌、書籍など大衆メディアによるイデオロギーの宣伝について数多くの研究成果が出版されている。本稿では、それに対して、社会的・政治的プロパガンダとして利用されたクリスマスを切り口に、そのプロパガンダが女性の日常生活にどのような影響を及ぼし、どれほど女性たちを国策に取り込んでいったのかに焦点を絞って考察したい。

家庭で祝うクリスマスは伝統的に女性の仕事であった。したがって、アドヴェント（待降節）の時期になると、どの女性雑誌も準備の仕方についての記事を掲載した。ここで分析対象とする、ナチ時代に販売部数第一位であった官製女性雑誌『女性展望』<sup>2)</sup>も主婦向けのクリスマスの実用記事を掲載した点では同じだったが、この雑誌が他紙とは決定的に異なる特徴は、1931年にすべての親ナチ女性団体をまとめて創設されたナチ女性団の機関誌だったという点にある。それゆえに、この雑誌は、ナチ女性団と、1933年にナチ化を受け入れた女性団体から構成された全国組織、ドイツ女性事業団の活動報告の場でもあり続けたことから、彼女たちが展開したクリスマスに関わる活動を知ることができる。こ

ここではそうした記事や写真の表象分析を通して、クリスマスの社会的・政治的利用が女性たちのどのような実践に結びついたのか見ていくことにする。

本論では、まずナチ時代の窮乏期を振り返り、エルツ山岳地方はじめ辺境地域で貧困に苦しむ労働者家族について、クリスマスの視点から紹介したい。『女性展望』のクリスマス号を紐解くと、困窮する同胞に対する理解を深め、民族共同体内での経済格差を狭めるための支援を読者に訴える記事が第二次世界大戦開戦前のクリスマス号まで毎年欠かさず掲載されている。こうした記事は、同胞の窮乏を救うという実際のレベルにとどまるだけでなく、辺境の同胞を常に意識させることで、一体の民族共同体に対する意識や帰属感を読者に醸成させる働きがあったと考えられる。

もちろん、ナチスの権力掌握時に600万人という失業者がいたわけだから、都市部にも貧窮はまん延していた。そうした経済的苦境に陥った人々に対する公的福祉政策が「ドイツ民族の冬期救援事業」（以下、冬期救援事業（WHW））だった。ナチ時代の冬期救援事業は1933年から始められており、10月から3月までの半年間が当てられた。しかし、容易に想像がつくが、クリスマスはその期間のなかで最も重要な時期だった。クリスマスツリーを飾ることができず、プレゼントももらえない貧困家庭もクリスマスを祝えるよう、クリスマス前の時期に大規模な募金・寄付の物品収集活動が展開され、「みんなのクリスマス」と称して地域ごとに組織的なクリスマス会が催され、参加できない場合はプレゼント小包が発送された。こうした活動には、ナチ党の組織をはじめ、ナチ女性団、ドイツ女性事業団、ドイツ女子青年団や少女団まで駆り出された。したがって第二に、『女性展望』に掲載された彼女たちの活動報告を基に、女性の視点から冬期救援事業の内実を再構成する。

この事業は、開戦後は「戦時冬期救援事業」と呼ばれた。開戦直前にドイツは、最も経済的に豊かな時期を迎えるようになり、冬期救援事業の支援対象者は変化した。開戦後は何といても前線の兵士を第一に活動が展開されるようになる。第一次世界大戦時と同様に、戦場にあっても故郷のクリスマスを迎えられるよう銃後は力を尽し、銃後は常に前線と一体で前線兵士を支えていることを示そうとした。そして、兵士に次いで、出征により男手を失い戦時奉仕活動で負担が増大した女性世帯の支援に力が注がれた。「戦時冬期救援事業」となって、活動内容がどう変化したのか確認してみたい。

第一次世界大戦時にクリスマスを使って戦争遂行に利するプロパガンダが展開されたように、第二次世界大戦でも『女性展望』の記事は、前線と銃後の一体化を図り、連帯が崩れないように努め続けた。戦場からのクリスマス・レポートの記事、母から前線の息子へのクリスマス小包や手紙の形をとって、あるいは、夫や父、兄弟不在のクリスマスをどう過ごすかなど「戦時のクリスマス」に関わる記事は、一丸となって前線を支えるためのプ

ロパガンダであったが、悪化する戦局と銃後への空爆に脅かされる戦争末期においては、そうした記事が銃後を守る女性たちの精神的支えになる側面もあった。

本稿の目的は、第二次世界大戦開戦までの時期に絞って、「冬期救援事業」と「みんなのクリスマス」という形でクリスマスが社会的・政治的プロパガンダに利用された実情を見極めることにある。開戦後の「戦時冬期救援事業」および「戦時のクリスマス」については、次稿で引き続き考察したい。

## 1. 辺境地域の労働者家族に対する支援

困窮のなかで暮らす辺境の労働者家族へ関心を向け、彼らが作るクリスマス製品やプレゼントになる品物を購入して、少しでも援助の手を差し伸べるよう、読者に訴える最初の記事は、『女性展望』創刊まもない、1932年12月15日のクリスマス号に掲載されている。「わが国の女性家内労働者たちは、甚だしい貧困に苦しんでいる。美しいドイツのレースは、常に喜んでもらえる贈物です」<sup>3)</sup>と何種類かの衿飾りレースを写真入りで紹介している。女性雑誌らしく、まず女性家内労働者の状況に目を向けており、1934年12月第1号も写真入りで「ポビンレースを織るエルツ山岳地方の女性家内労働者を助けてください!」<sup>4)</sup>とポビンレースを施した30cm×30cmの繊細なテーブルクロスを女性団の各大管区の支部ごとに注文を受け付けている。この時期は国全体が経済的困窮期であったので、どれほどの購買力があつたか分からないが、それゆえに組織的な購入を図ろうとしていることが窺える。翌年の1935年11月第3号には、装飾的なレースの衿の全面を使った写真を添えて、ポビンレースの発祥についての記事を掲載している。(図1)

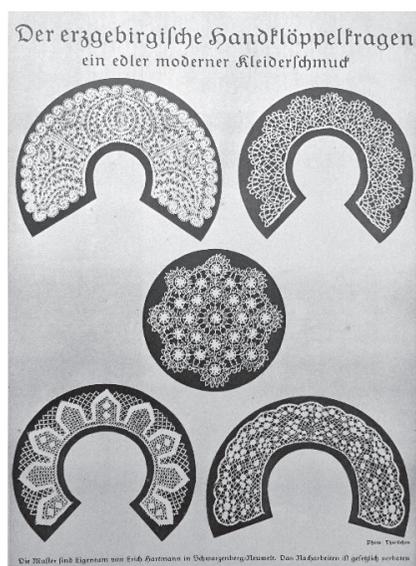
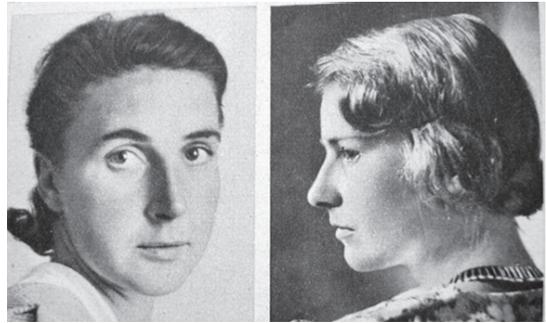


図1 「エルツ山岳地方のポビンレースの衿 上品でモダンなワンピースのアクセサリ」  
(出典：『女性展望』1935年11月第3号、383ページ)

図2 エレン・ゼンメルロート（左）とレナーテ・フォン・シュティータ（右）  
この若い2人が『女性展望』の編集責任者であった。  
（出典：『女性展望』1934年8月第2号、132頁）



1934年12月第1号はそもそも、伝統的なクリスマス人形や飾り、おもちゃを作る辺境の小村を紹介する特集号だった。『女性展望』の2人の編集責任者の一方であるエレン・ゼンメルロート（図2）が、グリム童話の「怖がることを学ぶために旅に出かけた男の話」をもじった「プレゼントすることを学ぶために旅する人々について」の記事を書いている。

荒天の季節に旅行をしたいと思う人はないだろうし、家でやらなければならないこともある。それに、そもそも旅行をするお金もない。しかし、ドイツの隅の小さな村や町には本当に困っている人々がいる。身近にいる人だけでなく、民族同胞にクリスマスの喜びを味わってもらうために、誌上旅行をしようというわけである。まず、エルツ山岳地方へ出発。

その土地の人々は、子どもたちの心をつかむ人形、ぬいぐるみ、降誕の厩を作る家内工業にたゆまず勤しんでいる。しかし、彼らは痩せ、心労が表情に表れている。食事は、コーヒートジャガイモとパンだけ。毎日同じものしか食べられない。子どもたちの顔は青白く、子ども時代は短く、年若くして成熟してしまう。彼らを手助けする親戚は近くになく、都市では受け取れる社会保障もないと、エルツ山岳地方の過酷な生活を活写している。

エルツ山岳地方を見学した後は、テューリンゲンの森へ、それからシュヴァルトヴァルトへ向かう。シュヴァルトヴァルトの農民の作る木の彫刻や、グラスや皿の絵付けに見られる美しいドイツの民族性とは対照的な厳しい土地の人々の生活が描写される。最後の訪問地はバイエルン東部辺境地である。ゼンメルロートは、貧困生活を送る数百万人の同胞がクリスマスを楽しく迎えられよう、クリスマス・プレゼントとして彼らの作る民芸品を購入すること、加えて彼らを救うために、総統が呼びかける冬期救援事業への協力を訴えている。<sup>5)</sup>

この導入記事に続いて、エルツ山岳地方のさまざまなおもちゃ、テューリンゲンの森に位置する世界最大のおもちゃ生産地ゾンネベルクの人形作り（図3）、シュヴァルトヴァルトの農家の工房、ドイツで最貧といわれるバイエルン東部辺境地（図4、5）のクリスマス・プレゼント向き製品について、それぞれ2ページの記事が並び、9ページに及ぶ大特集となっている。



図3 「人形作りの村々でクリスマス前の時期によく目にする路上風景」  
(出典：『女性展望』1934年12月第1号、359ページ)



図4 「バイリッシャーヴァルトの木靴職人」  
(出典：同誌、362ページ)



図5 「日曜日も働き者の手は休むことがない。ヘムステッチのために糸を引き出す骨の折れる仕事に従事する農村女性」  
(出典：同誌、363ページ)

1935年11月第3号でも、エルツ山岳地方の木製のおもちゃを紹介する記事が3ページにわたって掲載され、山岳地方の人々について理解を深めようとしている。続くエルツ山岳地方関連の記事2つに、さらに合計4ページが当てられている。

記事「エルツ山岳地方の仕事場で」は、山岳地方の人びとの暮らしを次のように紹介している。<sup>6)</sup> 信仰が理由で土地を追われたバーメンの鉱山労働者たちは、原生林に覆われた上部および中部フレーアタールの山地に住み着き、錫などの鉱石を掘り出して生計を立てている。地元の木材で家を建て、副業として、一年の特別な祝祭、特にクリスマスのためにロウソク立て、天使、伝説の登場人物、森の小人、鹿の木彫のほか、バーメンのスロバキア人、日焼けした顔の狩人、簡素な仕事着の森の労働者などの民族的煙出し人形を製作してきた。人々の信仰心が、世の中から隔絶され雪と氷の長い冬の土地でこの地方独特のクリスマスを守ってきたが、何百年も続くこの飾らない素朴で純真な民芸品は、これまで

も、そして今でも貧窮のなかで大きな危機に瀕しているという現実を伝えている。

この簡単な紹介のあとに、80年の歴史をもつ国立ザクセンおもちゃ専門学校が立地し、おもちゃの卸問屋が集まるグリーンハイニヒェンと、中心部がたった786mしかない小さな村、おもちゃの閉鎖的経済圏であるザイフェン（図6、7、8、9）を訪れたレポートが続く。苦しい生活を強いられていた人々の状況も、ヒトラー総統による運命の転換日以来、改善しつつあるとし、心温まる同胞の援助を受けていることを伝えている。この号の表紙には、その年の冬期救援事業の募金の証としてのエルツ山岳地方の「小さな騎手」の写真が載っている。（図10）表紙も記事も、辺境地域の人びとを援助するための冬期救援事業への協力を読者に呼び掛けることが目的だった。



図6 「ザイフェン村」  
（出典：『女性展望』1935年11月第3号、  
378ページ）



図7 「エルツ山岳地方のおもちゃ産業。ザイフェンの  
エーネルト家」  
（出典：同誌、372ページ）

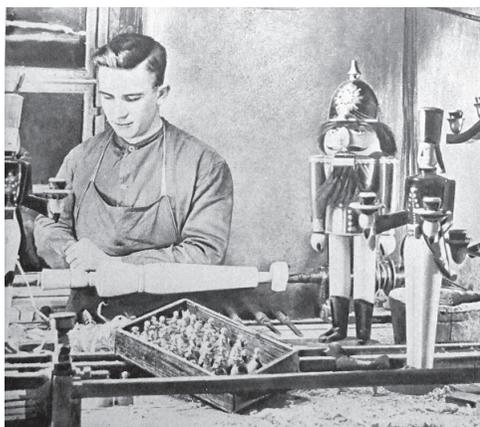


図8 「この旋盤で、鋏夫、天使、クルミ割り人形、  
煙出し人形やほかの美しいものすべての基本  
形が作り出される」  
（出典：同誌、374ページ）

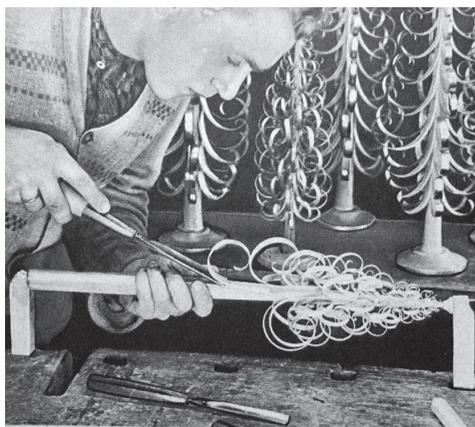


図9 「切削ツリーは、こんな風に誕生する」  
（出典：同誌、375ページ）

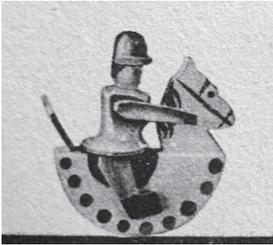


図 10 「冬期救援事業のクリスマス募金の証となるエルツ山岳地方の小さな騎手のことを考えてください」

(出典：『女性展望』1935年11月第3号、表紙)

冬期救援事業については次項で詳述するが、1929年の世界経済恐慌後に増加した失業者の救済対策は、ヴァイマル共和国時代には、さまざまな慈善団体が中心になって実施に移された。しかし、ナチ時代の特徴は、それが全国民を巻き込んだ国家事業となったことだった。貧困家庭は都市部の労働者層に多かったが、『女性展望』が繰り返し辺境に暮らす貧しい労働者家庭の記事を掲載するのには、上述したように、極貧に苦しむ辺境の人々が作る伝統的なおもちゃをクリスマス・プレゼントとして購入し、また冬期救援事業に協力して彼らを助けるよう読者に訴える目的があった。しかし、そうした実際的な目的にとどまらず、辺境の人々の記事は、日ごろは考えもしない国境のことや、会ったこともない人々もまた同じドイツ人同胞であることを読者に意識させることができた。つまり、ナショナリズムの醸成に作用したのである。生活苦と不況は、第一次世界大戦の敗戦により、押し付けられた過酷なヴェルサイユ条約に端を発していると多くのドイツ人は受け止めていたので、外国の援助が期待できない以上、同胞同士で助け合うほかなかった。そうした思いで冬期救援事業に参画するドイツ人の心情は、容易に排外主義的傾向を帯びた。

それでも1936年になると、生活にも経済的改善が見られるようになり、クリスマス・プレゼントにも贅沢品を購入できる余裕が現れる。そうすると、1936年11月第2号では、デパートなどで買い物せず、本物のドイツの民芸品や手工業品を購入するようにと勧められている。<sup>7)</sup> 1937年になっても、その方針は揺るがない。同胞を助けるというメッセージは残るものの、この頃の『女性展望』に影響を及ぼしていたゲルマン・ドイツ的世界観が現れている古くからある伝統的なおもちゃを、という理由が前面に出る。歴史的技術の伝承の重視、木や鉄など自然素材を使用することの価値、そして反大量生産の姿勢がはつきりと見て取れる。<sup>8)</sup> この傾向は、第二次世界大戦開戦前のクリスマス号である1938年11月第2号の記事まで変わることはなかった。

## 2. 「みんなのクリスマス」—ナチ女性団、ドイツ女性事業団、ドイツ女子青年団の活動—

この項では、冬期救援事業を中心に「みんなのクリスマス」について考察する。冬期救援事業は、しかしクリスマスの時期に限って実施されていたわけではないため、まずこの事業について概要をつかんでおきたい。<sup>9)</sup> その後、ナチ女性団、ドイツ女性事業団そして

ドイツ女子青年団に至るまで女性組織が具体的にどのように冬期救援事業と関わり、それに付随するどんな活動を展開したのか具体的に見ていきたい。

## (1) 冬期救援事業 (WHW)

「冬期救援事業」は、ナチス・ドイツ時代、ベルリンに本拠地を置く公的機関（法的には1936年12月1日の「ドイツ国民の冬期救援事業にかかわる法律」による）で、物品収集や募金活動を行い、集まった金品を直接的に、あるいはエーリヒ・ヒルゲンフェルトを指導者とするナチ国民福祉団 (NSV) の関連組織を通じて窮乏生活を送る国民を支援した。この支援活動は、国民の物質的困窮を和らげ、それにより、ナチ政権の内政の安定化に寄与することになった。さらに、第一次世界大戦敗戦以降、外圧によって苦しめられているという思いに囚われていたドイツ国民には、国民間の互助活動は民族共同体への帰属感を強化することにつながった。募金額については、第二次世界大戦開戦直後の1939/40年の冬期救援事業以降、公的福祉団体への税金からの補助額を上回った。すなわち、社会福祉政策に対する国家財政の負担が冬期救援事業により大幅に軽減されていたのである。

ナチス・ドイツの第1回冬期救援事業は、政権掌握の1933年の冬に始まったが、この活動はナチスが始めたわけではなかった。ヴァイマル時代に失業者向けに地方レベルで救援活動が23年に始まり、翌年の24年には、新旧のキリスト教団体、ドイツ赤十字、ドイツ・ユダヤ人中央福祉局や宗派を超えた福祉団体などが「全国自由福祉事業同盟」を立ち上げた。労働組合や労働者福祉団が経済・社会政策を要請した一方で、「同盟」は国民救援のための組織的募金運動を計画した。ブリューニング内閣時の31年9月から32年3月まで、いわゆる「冬期救援」のための第1回寄附運動が実施され、4200万マルクをもたらした。翌年も実施されている。

ナチ政権になると、ゲッベルスは夏から国民社会主義の冬期救援募金活動の準備を始め、アドルフ・ヒトラーは33年9月13日に「空腹と寒さに対する第1回冬期救援活動」を宣言した。以後も、ラジオ放送されるヒトラーのスピーチで活動はスタートした。困窮生活者は労働者階級に多かったため、冬期救援事業は、ナチ党に反感をもつ労働者階級を取り込む重要な国家政策的仕事と見なされた。実際、冬期救援事業は、失業者対策とあいまって、かなり早い時期にナチ政権が労働者から支持される要因となった。

第1回の冬期救援事業募金活動の成功後、第2回の募金活動を不安視したゲッベルスは、「国民連帯の日」の導入を決めた。1934年12月10日に、全国一斉の路上募金に有名な芸術家や党の幹部を動員し、自らも妻のマクダ・ゲッベルスと路上に立って、募金缶を42個も一杯にしている。この企画の大成功は、ヒトラーを大喜びさせた。「国民連帯」の

命名は、労働者の意識に根付いていた「国際連帯」というスローガンをプロパガンダ的意図で利用したものだった。<sup>10)</sup>

活動を支える恒常的ボランティア数は、120万人から150万人程度といわれている。彼らは、ナチ国民福祉団の「班長」の指導に委ねられていた。

「班」は、ナチ時代の行政組織の最下位に位置する組織だった。ドイツ全土は34の「大管区」(第二次世界大戦開戦後、東部地域の占領により1941年には43に拡大)に分けられ、各大管区の下には複数の「管区」が接続し、その各管区には複数の「支部」があり、各支部の下には複数の「細胞」が組織され、各細胞は複数の「班」(40世帯から50世帯単位)から構成され、全体としてピラミッド型の上下構造を作り上げていた。この巨大なネットワークにより、迅速な上位下達が可能になっていた。

さて、金品の寄付方法はさまざまあった。10月に開始される世帯ごとの古着回収、毎月すべての世帯に袋が配布され、2キログラムの食料を入れて提出する「2キロ寄付」、毎月第一日曜日に「煮込み鍋の日曜日」を実践し、それによって節約できた食材代の寄付、路上募金、商店での募金箱の設置、記念切手の販売やチャリティの文化行事やスポーツ競技会などがあった。大口の収入は、企業や団体の寄付と「賃金と月給からの救援税」だった。

就労者は冬の半年間、冬期救援事業のために毎月月給から天引きされることを義務と見なしていた。1936年からは6カ月間、全国一律10%の給与所得税額が天引きされ、冬期救援事業に支払われた。それまでは、地域によって金額はまちまちだった。

物品の寄付では初期には、家具や古着、石炭やジャガイモが圧倒的に多かった。その貨物運賃だけでも1000万マルクかかったが、それは国鉄の寄付として請求されなかった。

それでは、どれだけの金品が集まったのだろうか。

第1回目の冬期救援事業の寄付総額は、ヴァイマル時代の8倍以上の3億5800万マルク(現在のおよそ2403億9730万円)となり、その合計額は年々増大した。とりわけ開戦後の増額幅は大きく、最後の1942/43年の戦時の冬期救援事業では、最高額の15億9500万マルク(およそ9480億7570万円)に達した。収入金額の内訳を1937/38年度(4億1900万マルク)で多い順に見てみると、24.7%が企業と団体の寄付、24.3%が物品寄附(石炭、ジャガイモ、食料品、家具、書籍など「2キロ寄付」を含む)、19.2%が賃金と月給からの救援税、8.3%が煮込み鍋からの寄付、8.2%が路上募金、2.4%が国鉄の貨物運賃免除となっている。

一方、寄附された金品がどのように配分されたかを見てみよう。

困窮者は、冬期救援事業の地区事務所に申込書を提出し、地区事務所で石炭やジャガイモのほか、その他の物品や農産物を受け取った。現金支給はなかった。1936年の冬期の場合、3人の子どものいる援助の必要な家族は、13枚の燃料引換券、200キログラムのジャ

ガイモ、30 マルク相当の食料品引換券、衣料品または食料品引換券 3 枚、およびクリスマス、復活祭、権力掌握の日（1 月 30 日）にそれぞれ小包を受け取った。その合計金額は、労働者の月給のほぼ半分にあたる 100 マルクになると見積もられている。

先に挙げた 1937/38 年度のほぼ 4 億 2000 万マルクのうち、70% が困窮者に配分され、残りの 30% はナチ国民福祉団を通して救援事業「母と子」、「全国母親奉仕団」、結核患者救援事業、学校歯科事業、およびドイツ赤十字に支払われた。年を追うごとに冬期救援事業の寄付総額が増加する一方で、経済状況の改善により困窮者数が減少したこともあり、1940/41 年度は全体の 60% 近くが救援事業「母と子」に渡った。開戦後、男性が出征したあとの職場や仕事を女性たちが埋めたことから、幼稚園増設や保育士の増員、実質的に「働く母と子」の世帯を援助する必要が増大することになった。いずれにせよ冬期救援事業は、ナチ国民福祉団にとってなくてはならない財源になっていた。

## （2）冬期救援事業開始時のナチ女性団とナチ指導部との緊張関係と和解

冬期救援事業はクリスマス・シーズンに限定されるわけではなかったが、クリスマス前の時期には特にさまざまな寄付活動を実施し、困窮家庭にクリスマス小包を準備し、クリスマス会を催すことから、毎年クリスマス号にナチ女性団、ドイツ女性事業団、女子青年団の活動報告が載る。ところが、第 1 回目の冬期救援事業については、クリスマス号のみならず、冬期救援事業期間のどの号にも関連記事を見つけられなかった。ナチ女性団は、すんなりと冬期救援事業に協力したわけではなかったことが分かる。

見つかったのは、直接冬期救援事業とは関係のない、女性商工会議所、ナチ女性団、ハンブルク主婦連盟主催の 1933 年 12 月 9 日から 18 日にかけてハンブルクで開催される「経済と文化」をテーマとした展示会を予告する「ハンブルクの女性たちによるにぎやかなクリスマス市」<sup>11)</sup> だけだった。

クリスマス市と銘打っているため、アドヴェント・テーブルの飾り方が展示される部屋や、クリスマス市では安価で小さな生活用品を売る店が軒を連ねるが、主たる展示は、導入されたばかりの「結婚資金貸付制度」<sup>12)</sup> を解説する部屋や、伝統的な手工業の技術を披露する、織物、製本、金細工などの女性の作品を展示するホールであり、別のホールでは純毛や絹の実用的な洋服のファッションショーが開かれる。気に入った服を着ればいいのではなく、特に就労女性には目的に合った美しい服を紹介するという。そのほか、タイプライターや速記のコンクールが計画されており、ちょうどこの頃、男性失業者を救うために労働市場から女性を締め出す政策が取られていたことへの対抗姿勢のように見える。上階のギャラリーでは、乳幼児の世話、小さな子どもの暇つぶしの例、幼稚園の様子、小学生についてはドイツ女子青年団員が少女団への加入の意義を説明し、勧誘することになっ

ていた。

ようやく冬期救援事業が終わる 1934 年 3 月第 1 号に、「ナチ国民福祉団全国指導者ヒルゲンフェルトからのナチ女性団への感謝のことば」<sup>13)</sup> が掲載されていた。その文面からナチ女性団がどんな仕事を引き受けたかが分かる。

1933 年初秋から食料品、古着や下着を大量に収集して、全国の支部レベルでナチ女性団員は何千という裁縫部屋で、貧困家庭のために洗濯した衣類を繕い、リフォームする作業を何日も続けた。(図 11) 農作物、野菜、果物を集めて、冬に配布できるよう保存の缶詰を作ることもした。(図 12) 困窮者が昼食を摂れる安い食堂を運営し、何千という数のクリスマス小包を準備した。そのほか、「煮込み鍋の寄付金」、「2 キロ寄付」を集め、冬期救援事業の記念品や花を販売して収益を上げた。さらに、古くからのナチ運動の闘士とその家族が空腹や寒さに苦しんでいないか、配慮することも活動の一環だった。ヒルゲンフェルトが特に強調したのは、ナチ女性団員自身、恵まれた生活を送っているわけではなく、同じように困窮しているにもかかわらず、同胞のために献身的な働きを見せたことだった。

図 11 「集めた服を良好な状態に手直して冬期救援事業の準備をする」  
(出典：『女性展望』1939 年 9 月第 2 号、163 ページ)



図 12 「冬期援助事業で送る保存用缶詰作りに精を出すナチ女性団・ドイツ女性事業団員」  
1939 年ともなれば、ナチ女性団とドイツ女性事業団は団結してさまざまな社会活動に進出していた。  
(出典：同誌、162 ページ)

しかし、第1回冬期救援事業については、ヒルゲンフェルトの感謝の言葉はあっても、ナチ女性団の機関誌である『女性展望』の側からの救援事業への呼びかけや活動報告が一切ないことは意外に感じるだろう。このことは、権力掌握直後に起こった、女性政策を巡るナチ指導部とナチ女性団の緊張関係に起因すると考えられる。

1933年1月30日にヒトラー内閣が成立する。3月には全権委任法を国会で通過させ、いくつもの新法によって着々と独裁体制の構築を進め、7月14日の新党設立禁止法によって一党独裁体制が確立する。その一方で、女性政策については、失業対策の一環だったとはいえ、上級管理職からの女性の締め出し、州やその他の自治体からの女性官吏の解雇、女性教師削減、女子学生の入学制限、男性失業者を救うために結果として女性を退職させることにつながる失業減少法のなかの結婚資金貸与制度の導入を矢継ぎ早に行う。こうした女性差別的政策は、ナチ女性団員を驚かせ、当惑させた。ヒトラーを首相にすべく、選挙運動で最大限の支援活動を展開したナチ女性たちは、政治や経済分野にまで進出しようとは思わなかったが、自分たちが思い描いていた活動を展開できるものと考えていたからである。「新国家が女性を必要としないとわかっていたら、ヒトラーのために運動することなど絶対なかったでしょう<sup>14)</sup>」という声も女性指導者たちのなかから上がった。1936年5月第1号の記事「救援事業「母と子」の2年」にも、闘争期から政権掌握直後までのナチ党の女性抑圧スローガンと行動に驚きを感じたという回顧が載っている。<sup>15)</sup>

内政がまだ不安定だった1933年は、ナチ女性団にも波乱の多い時期だった。エルスベト・ツァンダーに代わって1933年4月に第2代のナチ女性団指導者となったのは、ドイツ女子青年団の指導者だった、まだ20歳のリュューディア・ゴチェブスキーだった。だが、彼女の考え方に女性解放的意図を見出した党は、その年の9月中旬に彼女をナチ女性団指導者のポストから解雇してしまう。ゴチェブスキー解任後の混乱を抑えるためにナチ女性団指導者として送り込まれたのは、ゴットフリート・クルマッハーだった。しかし、そもそも指導者が男性であることにも承服できなかったが、ナチ女性団員はクルマッハーの就任に男性同盟的考えを女性領域に押し付ける党の方針を見て取って反発した。そのため、彼もまた短期間で辞任するはめになった。クルマッハーの後にナチ女性団指導者を兼任したのは、ヒルゲンフェルトだったが、彼は早速、女性指導者の選任作業に入るよう女性団員に助言し、自分はいくまで新しい指導者が決まるまでの過渡的期間の指導者であることを宣言した。

1934年2月14日に、ゲルトルート・ショルツ＝クリンクがナチ女性団・ドイツ女性事業団の全国指導者のポストに就いた。先のヒルゲンフェルトの冬期救援事業でのナチ女性団の働きに感謝する言葉の直前ということになる。そもそも、非ナチ女性組織のうちナチ化を受け入れて、まとめられたドイツ女性事業団が成立するのは33年11月のことで、

ショルツ・クリンクの下で全国女性指導部が徐々に活動を開始するのが 34 年 2 月以降であることを考えれば、のちに大規模に女性組織が関与・運営する冬期救援事業とは異なり、第 1 回冬期救援事業は足並みがそろわないまま突入したのである。ヒルゲンフェルトの文章は、いかに多くの骨の折れる仕事をナチ女性団員が引き受けたかがよく分かる。彼女たちは、党指導部のやり方には強い不満を抱きながらも、困窮生活で苦しむ同胞をなんとか支援しなければならないという使命感に突き動かされたのだろう。

内政が安定するのは、1934 年 6 月末から 7 月にかけてのレーム事件で党内外の政敵を暗殺し、8 月 2 日のパウル・フォン・ヒンデンブルク大統領の死去後に、ヒトラーが大統領職を兼任した時点である。そうなれば、今度は本格的に富国政策を実施していくことになる。男女それぞれの世界の境界をはっきり引いたがゆえに、国民の半分である女性の協働を求めて、全国女性指導部の仕事振りに大きな期待がかけられることになった。国家事業と位置付けられる冬期救援事業だけみても、女性の手を借りなければ全く実行不可能なことだった。

1934 年 9 月の党大会において、ヒトラーは女性会議の席上で初めて演説をし、生物学的性差に基づく男女別の世界を基盤にしながらも、それぞれの世界で働くその価値は同等であると宣言した。<sup>16)</sup> この党大会は、ナチ指導部とナチ女性団との和解の場となった。(図 13、14) ショルツ＝クリンクは、ヒトラーの直後に演説をし、ナチ女性団・ドイツ女性事業団の全国指導者としてデビューしたが、11 月には「全国女性指導者」の肩書をヒトラーから許されることになった。(図 15、16) 34 年 2 月にショルツ＝クリンクがナチ女性団・ドイツ女性事業団の全国指導者に就任して以降、ナチ国民福祉団の建物の一部で徐々に組織的仕事を開始した全国女性指導部は、36 年 6 月にはベルリン、デルフリンガー通りの独自の建物に引っ越し、百室以上の執務室に 170 人の職員が勤務したが、その数は 41 年までに 580 人に膨らんだ。女性領域の政策を立て、実施する官僚機構の一部となった全国女性指導部とそれを統括する全国女性指導者のショルツ＝クリンクがナチ指導部から承認されていたことの証左といえよう。

1934 年時点で 80 万人だったナチ女性団員は 36 年までに 200 万人に膨れ上がったが、35 年 2 月からはそのエリート性を保つために、ドイツ女子青年団員のなかから、リーダーとしての資質を認められたものだけが入団を許された。一方、ナチ女性団と一体となって活動したドイツ女性事業団は、39 年時点で 400 万人の団員を擁していた。<sup>17)</sup>

ナチ女性団とナチ指導部との関係について少し補足したが、こうした経緯から、『女性展望』が積極的に読者に冬期救援事業への協力を呼び掛けるのは 1934/35 年の第 2 回からとなる。



図 14 「民族衣装のナチ女性団員に囲まれる総統」  
(出典：同誌、203 ページ)

図 13 「総統は、女性会議に出席する 1 万人もの女性団員の終わりのない喝采に迎えられる」  
(出典：『女性展望』1934 年 9 月第 2 号、202 ページ)



図 15 「4 人の子どもを持つ全国女性指導者、ゲルトルート・ショルツ＝クリンク」  
(出典：『女性展望』1935 年 9 月第 3 号、203 ページ)



図 16 1935 年 9 月の党大会におけるナチ女性会議で  
「右から、全国女性指導者ショルツ＝クリンク、総統、ルードルフ・ヘス、全国指導者ヒムラー、全国大臣 Dr. フリック、全国大臣 Dr. ゲッベルス」  
(出典：『女性展望』1935 年 10 月第 1 号、243 ページ)

前項では、辺境地域の貧困の労働者家族への経済的配慮を促す記事が毎年クリスマス号に掲載されていたことに触れたが、ナチス・ドイツ時代の初期に貧しい生活を余儀なくされていたのはドイツ国民全般とってよかった。その苦しさを『女性展望』は1932年12月15日号で、7年間子どもに恵まれずに「茨の森をゆく」聖母マリアの苦しみに重ねて、失業、困窮、そして借金を背負い込み、住む家もなく、子どもも産めないドイツ国民の辛苦を描いている。しかし、クリスマスの時こそ、「地に平和、人に喜びを」への憧れは大きくなる。愛の力、生への賛美、国民に尽くす民族共同体の意志により新しい生命が生まれる意義を考えようと書かれている。<sup>18)</sup> 1933年12月1日号でも、まだドイツ国民の心のなかには闇があり、仕事もなく、ほぼ毎日のパンに事欠き、暖かい衣類もなく、今なお不安と悲惨なのなかに生きている。しかし、神は、私たちに無限の愛をイエス・キリストに託して送ってくれた。クリスマスの時期にこそ、女性は愛に満ちた心を持ち、貧窮を見つけては、それを少しでも和らげる手助けをしようと、助言している。どちらもキリスト教精神に依拠した慰めと励ましである。<sup>19)</sup>

### (3) 冬期救援事業へのナチ女性団・ドイツ女性事業団の組織的参画

#### a. 寄付活動

1934年のクリスマス号において、『女性展望』の編集責任者の一人、レナーテ・フォン・シュティーダは、まず1934年12月第1号の「冬期救援という名付け親、新しい共同体という考え方の事業」<sup>20)</sup>で、貧乏な両親の子どもたちが厳しい冬をなんとか乗り越えるためには「名付け親」が必要だという。道路から奥まった建物や労働者用の質素な兵舎住宅の陽の射さない部屋にもささやかなクリスマスの喜びをもたらす必要がある。子どものいない夫婦や独身者には、是非とも冬期救援事業への協力を依頼したい。子ども服や食料の扶助を。一人では難しければ、友人と共同で実行して欲しい。贈り物をもらう側だけでなく、贈る側にも喜びと満足をもたらすとし、寄付はナチ国民福祉団の支部まで、と呼びかけている。

シュティーダは、次号でも「時代のなかのドイツのクリスマスの働き」<sup>21)</sup>を執筆している。この記事には、さまざまな時代におけるクリスマスの役割について解説されているが、今日のクリスマスについて、彼女は、未だ多くの家庭に貧困が居座っていて、家庭でクリスマスを祝うことができないケースが多い。それゆえ、現代においては、家庭の枠を越えて、共同体で祝うことが大切だと説明している。だからこそその第2回冬期救援事業への協力要請なのである。シュティーダの考えには、困窮家庭にもクリスマスの祝祭を体験して欲しいとの思いが第一義的にあるが、こうした共同体のクリスマスの推進は、家庭より共同体を、個人より公益を重視するという点で国民社会主義的でもあった。

続く1934年12月第3号には、第2回冬期救援事業中に街頭で販売されるレース飾りが紹介され（図17）、読者の購買意欲を掻き立てようとしている。冬期救援事業期間に、こうした小さな飾りのほか、木製のくるみ割り人形、サンタクロース、煙突掃除の人形、道化、小人、幼児キリスト、メルヘンの登場人物や人形などのさまざまなクリスマス飾りが販売された。（図18-1～4）代金には寄付金額が含まれていたため、製品を購入することが寄付につながった。そうした募金の証は、普通、辺境の困窮生活を送る手工業者に大量に発注されたので、彼らにとっては収益にもなった。1933年～1943年までに、およそ8000種類の募金に対する感謝の記念品が数百万個単位で手渡されたのである。<sup>22)</sup>

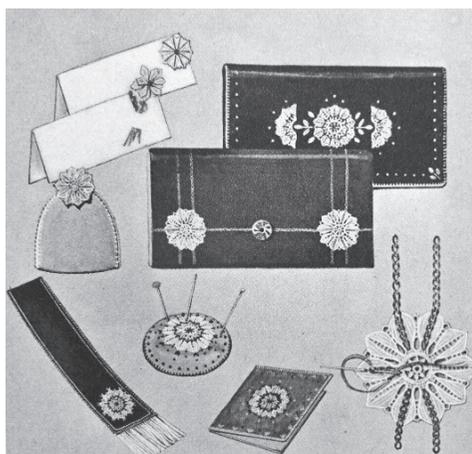


図17 「第2回冬期救援事業1月募金の証、ロゼット型レース」  
ザクセン地方南西部に位置するフォークトランドのブラウエンはレース産業の中心地。冬期救援事業のために1050万個のロゼット型レースを製作した。小さなレースを葉や待ち針、札入れやカードに飾り付けると美しい。  
（出典：『女性展望』1934年12月第3号、447ページ）

＜『女性展望』で紹介されたさまざまな冬期救援事業の募金の証＞



図18-1 「冬期救援事業のクリスマス募金の証」  
アイフェル丘陵には8～12人という子どくさんの家族が多いが、大家族を養うには耕地が少ない。若者の失業も問題だった。管区のある村に、木製の工芸品をつくる工場が建てられ、労働共同体が成立した。青少年800人が1日8時間の仕事を始めた。マクダ・ヘラーのデザインの7種類のクリスマス飾りが作られている。  
（出典：『女性展望』1937年12月第2号、378ページ）



図 18-2 「パーメンの森とエルツ山岳地方では、森から出る木材を使ったカスパー一族を作製しました。12月14日と15日に、ドイツの青少年たちが、15体の腕が動く彩色した木製の冬期救援事業の証をもって、路上募金を行います。」  
 右上のカスパーとカスパー劇の仲間たち。  
 (出典：『女性展望』1940年12月第2号、195ページ)

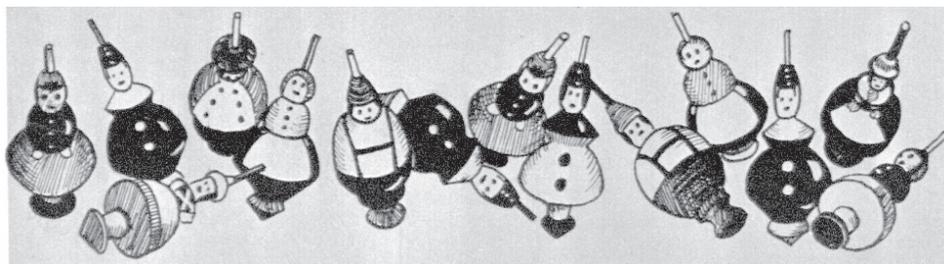


図 18-3 「この子たちは、冬期救援事業の強力な助っ人です。12月20日と21日に路上や広場で販売されます。コマのように回すとダンスをします。複数一緒に回して、最後まで踊り続けた子が勝者です。」  
 (出典：『女性展望』1941年12月第1号、168ページ)

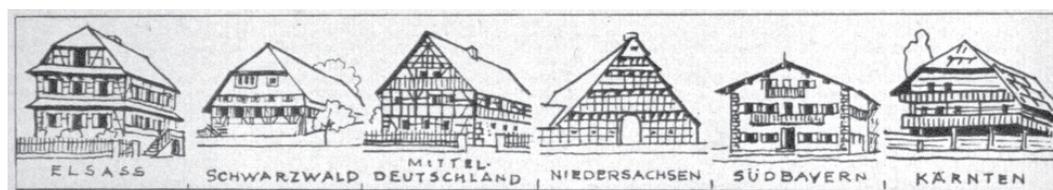


図 18-4 「1942年11月21日と22日に行われる第3回戦時冬期救援事業募金の証は、ドイツのさまざまな地方の農場が描かれている12の天然木版です。平時も、とりわけ戦時に農民層が果たさなければならない課題を思い起こさせます。平穏でゆったりした家々は、土地に根差したドイツの農民文化から全ドイツ国民に流れてくるエネルギーを感じさせてくれます。」  
 左からエルザス、シュヴァルツヴァルト、中部ドイツ、ニーダーザクセン、南部バイエルン、ケルンテン  
 (出典：『女性展望』1942年11月号、94ページ)

募金として購入する記念品は人気だったようで、1914年生まれのT. H. 夫人は、冬期救援事業の人形のことをはっきりと記憶していて、戦後に次のように振り返った。

小さな人形は至る所、路上で売られました。戦時冬期救援事業のために赤い募金用缶を使ってお金があつめられ、そして寄付の証に人形が手渡されました。冬期救援事業の人形、それは何ととっても可愛らしくて、どれも気に入りました。人形にナチらしさはみじんもなかったです。それは高額でなかったことは確かです。(…)私を私は毎年クリスマスツリーに飾りましたし、今でも吊り下げています。<sup>23)</sup>

路上での募金活動を担ったのは、青少年たちだったが、家庭の女性たちにはどのような形の協力が求められたのだろうか。

#### b. 「みんなのクリスマス」—クリスマス小包を作る

1936年11月第2号の記事「私たちはクリスマス小包を作る—でも良く考えて！」<sup>24)</sup>では、冬期救援事業の一環で、クリスマスを祝えない貧困家庭のために各家庭でクリスマス小包を作り、支部の冬期救援事業団に提出できるよう、小包の作り方について具体的な提案が書かれていて、興味深い。まず、受け取る相手を想定する。独身男性なのか、子どもさん家庭なのか、老母なのか。予算は5マルクと設定してみる。例えば、老母向けの小包であれば、食料や石炭は冬期救援事業団からもらえるので、それ以外の、ポートワイン、良質なコーヒー豆250グラム、コンデンスミルクの缶を1つか2つ、暖かい下着1枚、これで5マルクになる。それに、家の本棚から詩集か小説を1冊。でも、不要な本ではなく、読んで面白かったものをプレゼントしてほしい。さらに自家製レープクーヘンを少し、チョコレート1枚。カラフルな紙で包装し、モミの小枝も添えたい。見知らぬ寄付者の心からの挨拶も。でも名前は明かしてはいけない。なぜなら、受け手にお礼を言わせる義務を取り除くためであって、こうした寄付は、給料からの救援税や煮込み鍋の寄付と同様に、個人からの贈り物ではなく、ドイツ国民の冬期救援事業によるものだからである。国から受け取る石炭切符や魚や肉の缶詰と同じとはいえ、心を込めて選択し包装したクリスマス・プレゼントという大きな違いがあると書かれている。

だれに贈りたいが分からない場合には、缶詰、ソーセージ、ジャム1瓶、塊のベーコン、本、おもちゃを勧めている。腐りやすいものや、壊れやすいものは避けること。小包には、どの受取人用なのか、中身を記載したうえで、支部の冬期救援事業団に提出する。今年のクリスマスも、見知らぬ同胞の喜ぶ顔と感謝の心を想像するだけで、小包を作る努力は報われるはず、とある。

翌年の1937年12月第2号の「ドイツ国民の大きな仲間意識—ドイツ全土が楽しいクリ



図 19 「第三帝国では、すべての民族同胞のためにクリスマスツリーが灯される」  
それも、第二次世界大戦開戦後に灯火管制が敷かれるまでのことだった。  
(出典:『女性展望』1937年12月第2号、376-377ページ)

図 20 「男性も支部ごとのプレゼントのおもちゃ作りに励む」  
(出典：同誌、376 ページ)



スマスを祝う」<sup>25)</sup> (図 19) も昨年の記事を執筆したインゲボルク・アルトゲルトがまとめているが、貧困家庭に贈られる小包はもはや各家庭で作って提出することは求められておらず、寄付の品は依頼するものの、小包づくりは支部の冬期救援事業団でボランティアが組織的に行うようになった。(図 20) 石炭交換券、小麦、砂糖、魚の缶詰は大管区から配分されることになっていたの、それ以外の、商店や主婦たちからの寄付として集まった酢漬け缶詰、プフェッファークーヘン、リンゴ、衣類、床屋の商品券、書籍、おもちゃなどは、行政組織の各支部で適切に分配され小包づくりが夜遅くまで続いていると報告がある。小包作りは、子だくさん家庭なのか、一人暮らしなのか、高齢者世帯なのかといった受取人のタイプ別だけでなく、行政組織の「細胞長」は、下位組織である「班長」が班世帯のなかから上がって来る困りごとを「細胞長」に伝え、「細胞長」が「支部部局長」へ住民の願いを仲介する役割を担った。ナチ看護師団、救援事業「母と子」の指導者も特別な被保護者の情報を伝え、きめ細やかな対応を取る体制が出来上がっていると報告している。

小包を届けることは、小包を作るよりずっと気持ちのいい仕事になるが、それを引き受けるのは、農村ではナチ女性団、全般的には突撃隊員やヒトラー・ユーゲントだった。子どもたちがクリスマスの日プレゼントを受け取れるようにという配慮もあった。

「みんなのクリスマス」のモットーは、「アードルフ・ヒトラーのドイツでは、置き去りにされる人は誰一人いない」だった。冬期救援事業の贈り物は施し物ではなく、寂しく孤

独なクリスマスを迎える同胞がいることを耐え難く感じる多くの人びとの心の印であり、一方、贈物を受けた人は、プレゼントを集め、小包にしてくれた心配りのなかに、個人の重荷が共同体によって共に担われていると感じるだろうと、アルトゲルトは冬期救援事業の意義を強調している。

冬期救援事業では、根本的には困窮する同胞を助けなければならないという同胞意識や善意の行動が求められたので、国民社会主義のイデオロギーに抵抗を示す者も含めて、多くの国民を巻き込むことに最も成功した事業となった。

### c. 「みんなのクリスマス」－民族共同体が開催するクリスマス会

冬期救援事業のもう一つの大行事は、ドイツ全土で一斉に行政組織の支部ごとに多人数のボランティアを動員して行われるクリスマス会だった。ゲッベルスのスピーチの中継で始まり、サンタクロースが登場してプレゼントが渡され、ナチ女性団やドイツ女子青年団によるクリスマス劇が演じられる。コーヒーとクッキーやケーキもなくてはならない。国民のクリスマス・パーティに一度でも参加した人は、子どもたちの歓声を忘れないだろうと、アルトゲルトは記している。(図 21) 一人暮らしの人や高齢者のための静かで落ち着いたパーティでは、古い懐かしいクリスマスの歌が響き、一人ひとりが望んだ贈物を受け取る。正餐と食後のパンチを楽しむと、雰囲気は寛いできて、日ごろの憂いを忘れ、大きな家族のなかにいる気分になれると、描写している。(図 22)

同じ記事のなかで、ドイツ国内や外国の多くの新聞が、前年の冬期救援事業の国民のクリスマス会について、2万3千カ所の集会所で300万人以上の子どもたちがプレゼントをもらったこと、そして300万人という数字から、どれほどの仕事、そして率先して事に当たるどれだけ多くの人々が関わったか想像できるとの賞賛の声が紹介されている。しかしアルトゲルトは、無味乾燥な数字の背後にある口に出しては言えない困窮と悲惨にも読者の注意を喚起している。

それぞれの家庭が数十年の歴史のなかで、クリスマスの祝祭の形を固定してきたように、今や冬期救援事業によるクリスマス会もここ数年を経て、冬期救援事業全国指導者が決めた一定の手順を見出していた。しかし、それを補足するように地域ごとのアイデアにより、たとえば寄付をできるだけ多く得られるように、広場でヒトラー・ユーゲントがクリスマスの歌を歌ったり、幼稚園や保育園でクリスマス会を催したり、親衛隊、国防軍、労働奉仕団といったそれぞれの組織でも特別なプレゼントが渡されたり、老人ホームをドイツ女子青年団員が不意に訪れてアドヴェントの歌を歌って思いもかけぬ喜びを与えたりした。



図 21 「全国民からの寄付のプレゼントがナチ国民福祉団とナチ女性団によってクリスマスに配られ、幸せに満たされるドイツの子どもたちの数は数百万人にのぼる」  
(出典：『女性展望』1937年12月第2号、376ページ)



図 22 「高齢者や一人暮らしの人も、冬期救援事業によって、クリスマスプレゼントを十分受け取る」  
(出典：同上)

こうした共同体レベルで組織的に実施される「みんなのクリスマス」を始め、年間に実施される労働の日や収穫祭などの祝祭プログラムの案出に負担が生じないように、またプログラム内容に大差が生まれないためにもマニュアル本や歌、ダンス、素人芝居などの参考本が出版された。1937年11月第2号には、全国女性指導部出版部局の専門分野「民衆劇と催しの構成」から1937年9月に出版された『民衆劇と祝賀会開催のための基本リスト』が紹介されている。民族的習慣、文学、歌、演奏曲、ダンス、素人芝居が網羅されていて、基本的な祝祭プログラムを構成する際の欠かせない参考資料になるよう考えられていた。そのほかに、歌集として『輪』や全国労働奉仕団の『歌いながら行進しよう』、あるいはドイツ女子青年団の歌集『私たち女子青年は歌う』には民謡に加えて新しい歌も収められていた。暗譜で覚えることが大切という助言も付け加えられている。『金色の橋』は子ども団の歌集だった。「歓喜力行団」からは『私たちの共同体のダンス』が出版され、そのほか素人芝居を紹介する本もあった。共同体の祝祭時だけでなく、家庭音楽の普及目的で、バイオリン、フルート、ピアノ演奏に適した曲のリストも発行された。<sup>26)</sup>

ナチ教員連盟は学校共同体の遊びや、祝祭、余暇プログラムを紹介する公式な雑誌『ド

『ドイツの学校行事』を発行していたが、1938年にはそのなかに、「民族上のドイツ人のクリスマス祝祭」が掲載された。そこには、プログラムの順番だけでなく、歌う歌を指定し、朗読するテキストを挙げている。それどころか、参加者の反応の演出まで記載されていたという。プログラムの流れは、教会の礼拝を模したもので、個々の呼びかけと共同体の応答、音楽の挿入、全員の歌、スピーチの中間部に祈りのような呼びかけが挿入され、最後に共同体への信仰告白が続くというものだった。キリスト教の儀式の形式を借りて、中身を変えただけだった。空間の設定も同様で、長いベンチの列があり、説教壇に似た演壇には総統の絵あるいは鉤十字の旗がかけられ、総統が救世主と同一視されるよう演出された。<sup>27)</sup>

#### d. 新しい民族同胞を迎えて

ドイツは1938年に最も経済的に豊かになり、クリスマスの時期にはほぼ完全雇用の状態になった。預金通帳の所持率も国民全体の50%に達していた。「みんなのクリスマス」は、高齢者や独居世帯向けに、また保育園・幼稚園や学校で、さまざまな組織や団体で実施され続けたが、1938年の「みんなのクリスマス」の主たる対象は、10月1日にチェコスロバキアからドイツに割譲されたズデーテン地方に居住しているドイツ人になった。1938年12月第1号には、ズデーテン地方の子どもたちのために、たゆまずプレゼントを作製するナチ女性団やドイツ女性事業団、ドイツ女子青年団の活動の報告記事(図23、24)が2つ掲載されている。記事「私たちはクリスマスに向けて工作する」<sup>28)</sup>では、恒例の「2キロ寄付」袋の回収(開戦と同時に食料切符が導入されると、食材の寄付は現金寄付に代替された)、街頭募金、煮込み鍋料理の配食、困窮地域や辺境地域へのクリスマス・プレゼント作りのほかに、この年は1000万人近くのドイツ人が辺境地域に戻ってきたため、活動できる人材の強化と集中化のために、全国女性指導者ショルツ＝クリンクは女子青年団にも呼びかけを行う必要に迫られた。

11月中に全国のすべての大管区で、一致してズデーテン・ドイツ人の子どもたちにプレゼント用のさまざまなおもちゃ作りが進められたが、子ども用ソックス、帽子、襟巻、チョッキ、フェルトや皮の残りから室内履き、革靴、暖かい乳児服や下着といった実用的なものも山のように作られた。編み物は、学校で習った程度の女子青年たちには母親学校や集会所での作業時間だけでは間に合わず、子どもたちを喜ばせようとの一心で自分の自由時間を犠牲にして編み続けたと報告がある。仕事は11月末で完了し、12月初日にはプレゼント品が並べられ、数日後にはズデーテン・ドイツ人に配布できるように冬期救済事業団に渡すことができたと報告されている。



図 23 「母親学校や集会所の夜の集いで、果物の木箱が人形のゆりかごに作り替えられる」

母親奉仕団の教員や女子青年団の作業担当者からのこぎり、ハンマー、ドライバーの使い方を習って、人形用ゆりかごのほかにも人形用乳母車、ドールハウス、積み木など多様なおもちゃが生み出された。

(出典：「女性展望」1938年12月第1号、363ページ)

図 24 蠟引き布や革製の小動物が作られ、仕事場にはズデーテンの子どもたちのために数百ものウマ、キリン、カモ、ウサギ、犬が並んだ。  
(出典：同上)



大ドイツ建設を目指してオーストリア併合を実現し、ズデーテン地方をチェコスロバキアから割譲させ、次には第二次世界大戦開戦後に占領した東部地域に、ヒトラーの指令に従って、移民として長く諸外国に定住していた民族上のドイツ人の帰還が始まる。そうした国外から戻ってきたドイツ人たちを民族共同体に組み入れるためにクリスマスは利用された。ドイツが、経済的貧困に苦しむ新たな民族同胞に経済的援助の一環としてクリスマス小包を贈り、ドイツ精神や文化を啓蒙するクリスマス会を開くことで、民族上のドイツ人の共同体への帰属感を強化しようとしたのである。支援する方も、ナチ政権成立以来の貧困家庭の援助という慈善活動を通して連帯は強まっていった。しかし、それだけにとどまらず、新しい同胞を迎えるにあたり、ナチ指導部は、家庭におけるクリスマスの祝祭にも、国境外にいるドイツ人との連帯を象徴する手段を導入した。それは「青いロウソク」だった。

1938年12月第1号の記事「1938年のドイツ民族のクリスマス」は、「青いロウソク」について、次のように説明している。忠誠を象徴する色である青のロウソクは、未だ大ドイツから排除され、国境を越えてこちらに憧れのまなざしを向ける多くのドイツ人たちとの絆の印である。<sup>29)</sup> この青いロウソクを灯す習慣は、1937年に始まった。このロウソクを買うことで「真の民族意識」が示せると宣伝され、大々的な購入や献金の圧力が各家庭に加わった。<sup>30)</sup>

## おわりに

政権を掌握した 1933 年に始まった冬期救援事業の展開のなかで、「みんなのクリスマス」は国家挙げての大事業となった。公的クリスマスはドイツ民族特有の最良の伝統となったと、ナチ指導部は自負したが、39 年になってもなお、大きなクリスマスツリーを立てて行われる共同体のクリスマスが、家庭内で祝われるクリスマスと有機的に結びつくことはなかった。<sup>31)</sup> 人々は、経済的に困窮する民族同胞を助けるために慈善行為として、自発的に、あるいは義務的に「みんなのクリスマス」を支えはしたが、だからといって、伝統的なクリスマスを家庭で祝うことをやめて、自分たちも一緒に国民社会主義的な「みんなのクリスマス」を祝えばそれでよいとは考えなかったからである。ここでは取り上げなかったが、キリスト教的クリスマスを排除し、ゲルマン的冬至祭に置き換えようとしたアルフレート・ローゼンベルクやハインリヒ・ヒムラーら一部のナチ指導者の試みも、特定のナチ組織内で行われるにとどまり、家庭で祝う伝統的なクリスマスを駆逐することは到底できなかった。

冬期救援事業と「みんなのクリスマス」は第二次世界大戦が始まると、その主たる対象は前線の兵士となり、「戦時のクリスマス」が喧伝されるようになる。戦時中のクリスマス・プロパガンダについては、稿を改めてまとめることにする。

## 注

- 1) 桑原ヒサ子「政治宣伝に利用されるドイツのクリスマス—1870 年から 1930 年代はじめまで—」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.20、2022 年、139-154 ページ参照。
- 2) 雑誌『女性展望』の詳細については、桑原ヒサ子『ナチス機関誌「女性展望」を読む 女性表象、日常生活、戦時動員』青弓社、2020 年、10-18 ページ参照。
- 3) *NS Frauen Warte*, 1. Jg. H. 12 (15. Dezember 1932), S. 283.
- 4) *NS Frauen Warte*, 3. Jg. H. 12 (1. Dezemberheft 1934), S. 379.
- 5) “Von Leuten, die reisen, das Schenken zu lernen” (Ellen Semmelroth), ebd., S. 355.
- 6) “In der erzgebirgischen Werkstatt Knecht Ruprecht,” *NS Frauen Warte*, 4. Jg. H. 12 (Novemberheft 1935), S. 374-376.
- 7) “Die Kerzen brennen und wir schenken” (Ellen Semmelroth), *NS Frauen Warte*, 5. Jg. H. 12 (Novemberheft 1936), S. 375.
- 8) “Das Spielzeug” (Hans Fr. Geist), *NS Frauen Warte*, 6. Jg. H. 11 (Novemberheft 1937), S. 338-340; “Das Wunder im Grenzland” (Fritz Thost), *NS Frauen Warte*, 6. Jg. H. 12 (Dezemberheft 1937), S. 369-371.
- 9) まとめるにあたり、以下を参照した。“Winterhilfswerk des Deutschen Volkes” ([https://de.wikipedia.org/wiki/Winterhilfswerk\\_des\\_Deutschen\\_Volkes](https://de.wikipedia.org/wiki/Winterhilfswerk_des_Deutschen_Volkes)) [2022 年 9 月 14 日アクセス]
- 10) 「国民連帯の日」については、以下参照。“Tag der Nationalen Solidarität” ([https://de.wikipedia.org/wiki/Tag\\_der\\_Nationalen\\_Solidarit%C3%A4t#:~:text=Als%20Tag%20der%20Nationalen%20](https://de.wikipedia.org/wiki/Tag_der_Nationalen_Solidarit%C3%A4t#:~:text=Als%20Tag%20der%20Nationalen%20)

Solidarit%C3%A4t,der%20Sammelb%C3%BChse%20um%20Geldspenden%20warben.) [2022 年 9 月 19 日アクセス]

- 11) “Bunter Weihnachtsmarkt Hamburger Frauen,” *NS Frauen Warte*, 2. Jg. H. 11 (1. Dezember 1933), S. 318.
- 12) 1933 年 6 月の失業減少法に組み入れられた結婚資金貸付制度は、男性工場労働者の月収の 4、5 倍の最大千マルクを無利子で貸し付ける制度だった。経済的に苦しい若い夫婦が新婚生活に必要な調度品を揃えるためのものだったが、受給条件は妻の退職だった。また、子どもを 1 人産むごとに四分の一の額の返済が免除されたので、4 人の子どもを産めば返済義務はなくなった。したがって、この制度は経済政策、労働市場政策、人口政策的意味をもっていた。
- 13) “Der Dank des Reichsführers der N. S. V. Hilgenfeld an die N. S. Frauenschaft,” *NS Frauen Warte*, 2. Jg. H. 18 (1. Märzheft 1934), S. 355.
- 14) クローディア・クーンズ『父の国の母たち—女を軸にナチズムを読む』上、翻訳工房「とも」訳、姫岡とし子監訳、時事通信社、1990 年、227 ページ。
- 15) “Zwei Jahre Hilfswerk ‚Mutter und Kind‘,” *NS Frauen Warte*, 4. Jg. H. 23 (Maiheft 1936), S. 744.
- 16) “Die Rede des Führers auf dem Frauenkongreß am 8. September 1934,” *NS Frauen Warte*, 3. Jg. H. 7 (2. Septemberheft 1934), S. 210-212.
- 17) クーンズ、前掲書、286 ページ。
- 18) “Weihnacht” (Klara Schloßmann=Lönnis), *NS Frauen Warte*, 1. Jg. H. 12 (15. Dezember 1932), S. 267-268.
- 19) “Der Sinn der Adventszeit,” *NS Frauen Warte*, 2. Jg. H. 11 (1. Dezember 1933), S. 306.
- 20) “Die Winterhilfsspatenschaft, ein Werk des neuen Gemeinschaftsgedankens” (Renate von Stieda), *NS Frauen Warte*, 3. Jg. H. 12 (1. Dezemberheft 1934), S. 367.
- 21) “Von dem Wirken deutscher Weihnacht in den Zeiten” (Renate v. Stieda), *NS Frauen Warte*, 3. Jg. H. 13 (2. Dezemberheft 1934), S. 390.
- 22) Christina Deutschbein und Nils Korsten: *Heilige Nacht? Das Weihnachtsfest im Dienste der NS-Propaganda. Materialien & Studien zur Alltagsgeschichte und Volkskultur Niedersachsens*, Cloppenburg, 2007, S. 26.
- 23) Ebd., S. 29.
- 24) “Wir packen Weihnachtspakete—aber mit Überlegung!” (Ingeborg Altgelt), *NS Frauen Warte*, 5. Jg. H. 12 (Novemberheft 1936), S. 389.
- 25) “Die große Kameradschaft des deutschen Volks—Ganz Deutschland feiert ein frohes Weihnachten” (Ingeborg Altgelt), *NS Frauen Warte*, 6. Jg. H. 12 (Dezemberheft 1937), S. 376-377, u. 387.
- 26) “Feste wollen gestaltet sein, Grundliste für Volksspiel und Fei ergestaltung” (Ursula Fischer), *NS Frauen Warte*, 6. Jg. H. 10 (2. Novemberheft 1937), S. 297 u. 300.
- 27) Esther Gajek: Nationalsozialistische Weihnacht. Die Ideologisierung eines Familienfestes durch Volkskundler. In: *Politische Weihnacht in Antike und Moderne zur ideologischen Durchdringung des Fests der Feste*, hrsg. v. Richard Faber und Esther Gajek, Würzburg (Verlag Königshausen & Neumann GmbH), 1997, S. 186-187.
- 28) “Wir basteln zu Weihnachten,” *NS Frauen Warte*, 7. Jg. H. 12 (1. Dezemberheft 1938), S. 362-363; “Jugendgruppen helfen dem Weihnachtsmann,” ebd., S. 364.
- 29) “Deutsche Volkswihnacht 1938,” *NS Frauen Warte*, ebd., U. (=Umschlagseite) 2.
- 30) Deutschbein und Korsten, a. a. O., S. 46.
- 31) Gajek, a. a. O., S. 198.